

布勢遺跡

一個人住宅建設事業に係る発掘調査報告書—

2023. 3

鳥取市教育委員会



布勢遺跡調査地遠景(南西上空から)



布勢遺跡令和4年度調査区全景(西上空から)

序

この報告書は、開発事業計画に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、実施した布勢遺跡の発掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならぬ市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。中でも「鳥取西道路」建設に伴って行われた発掘調査では多くの遺跡から膨大な量の遺物が出土し、地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県地域づくり推進部文化財局とつとり弥生の王国推進課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和5年3月

鳥取市教育委員会
教育長 尾 室 高 志

例　　言

1. 本書は個人住宅建設事業に伴い、令和3年度(2021)及び令和4年度(2022)に国・県補助を得て、鳥取市教育委員会が実施した布勢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 布勢遺跡の調査地は鳥取県鳥取市布勢557-9に所在し、調査面積は97.3m²である。
3. 発掘調査に際しては公益財団法人 鳥取市文化財団の支援を受けた。
4. 遺跡での掘削作業、記録作成、室内的整理作業、報告書作成は鳥取市教育委員会が監理し、公益財団法人 鳥取市文化財団が行った。
5. 本書における遺構図は第1・2図を除いてすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
6. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

巻頭図版

序

例言

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯と経過.....	1
第2節 調査体制.....	1

第2章 遺跡の位置と歴史的環境..... 2

第3章 調査の成果

第1節 令和3年度試掘トレンチの調査.....	4
第2節 令和4年度の調査.....	10
第3節 まとめ.....	17

写真図版

報告書抄録

挿図目次

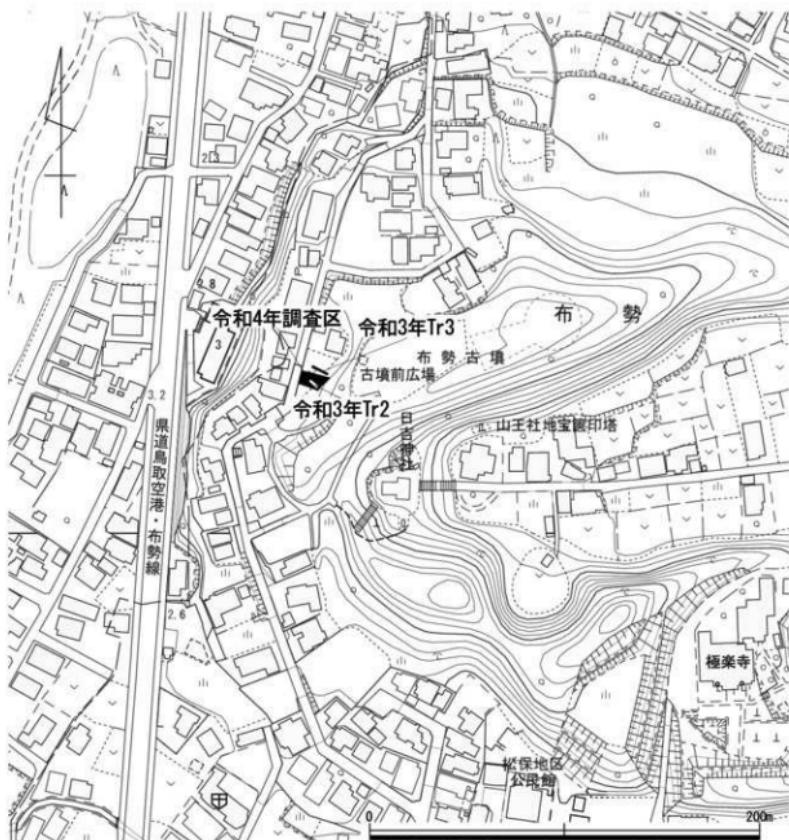
第1図	布勢遺跡調査地位置図	
第2図	布勢遺跡周辺遺跡分布図	3
第3図	令和3年度試掘Tr3P-1~8・10実測図	4
第4図	布勢遺跡調査区全体図	5・6
第5図	布勢遺跡調査区断面図	7・8
第6図	令和3年度試掘Tr3出土遺物実測図	9
第7図	SX-01実測図	10
第8図	SK-01、P-1~27実測図	11
第9図	P-28~46実測図	12
第10図	令和4年度調査区出土遺物実測図(1)	14
第11図	令和4年度調査区出土遺物実測図(2)	15
第12図	令和4年度調査区出土遺物実測図(3)	16

図版目次

卷頭図版	布勢遺跡調査地遠景(南西上空から) 布勢遺跡令和4年度調査区全景(西上空から)	
図版1	布勢遺跡調査地遠景(北西から) 布勢遺跡調査地近景(南西から) 令和3年度試掘Tr2、3設定状況(北東から) 令和4年度調査区近景(北東から)	
図版2	試掘Tr2掘り下げ状況(北西から) 試掘Tr3掘り下げ状況(北西から) 試掘Tr3掘り下げ状況(南東から) 試掘Tr3北東壁土層断面(南から) 試掘Tr3南西壁土層断面(北西から) 試掘Tr3北西壁土層断面(南東から) 試掘Tr3北西部遺構検出状況(南西から) 試掘Tr3P2断面(北東から)	
図版3	令和4年度調査区全景(北東から) 調査区中央部遺構検出状況(北東から) 調査区下段遺構検出状況(北東から)	
図版4	調査区北壁A-A'断面(南西から) 調査区e-e'断面(南西から) 調査区c-c'断面(北東から) 調査区南壁B-B'断面(北西から) SI-01検出状況(北西から) 段状遺構1検出状況(南西から) 段状遺構2、3検出状況(北東から) SX-01検出状況(北東から)	
図版5	SK-01検出状況(東から) SD-01検出状況(北東から) SD-02~04検出状況(北東から) SD-02・04完掘状況(南西から) SD-03周辺遺物出土状況(南西から) SD-03検出状況(北西から)	
図版6	調査区北壁A-A' SD-04断面(南西から) 調査区e-e' SD-04断面(南西から)	
図版7	調査区d-d' SD-04断面(南西から) SD-04完掘状況(南西から) P-2完掘状況(北東から) P-3完掘状況(北東から) P-4断面(北東から) P-6完掘状況(北東から) P-7断面(北東から) P-9完掘状況(北東から)	
図版8	P-10・11断面(北西から) P-17~21検出状況(南から) P-20断面(北東から) P-22完掘状況(北東から) P-24断面(北東から) P-25完掘状況(北東から) P-28断面(北東から) P-31断面(北東から)	
図版9	P-32断面(北東から) P-33断面(北東から) P-36断面(南西から) P-37断面(南西から) P-39断面(北東から) P-42断面(北東から) P-43断面(北東から) P-44断面(南から)	
図版10	令和3年度試掘Tr3出土遺物	
図版11	令和4年度調査区出土遺物	

表目次

第1表	布勢遺跡検出ピット一覧表	12	第2表	布勢遺跡出土遺物観察表	18
-----	--------------	----	-----	-------------	----



第1図 布勢遺跡調査地位置図 (S=1:2,500)

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯と経過

今回の布勢遺跡の調査は個人住宅建設に伴って実施したものである。開発事業区域は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、原因者と協議を行った結果、開発事業前に遺構や遺物の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。試掘調査の依頼は令和3年2月19日付で市教育委員会に提出され、この依頼を受けて令和3年4月26日から5月28日にかけて実施した。トレッチは1.5m×5.5m、1.5m×9.0mの2か所設定し、人力によって掘り下げを行った。

調査の結果、ピットや土壠、溝状遺構などが検出されたほか古代の土師器皿や古墳時代前期の土師器片などの遺物が出土した。この調査結果をもとに開発事業者と遺跡の保存に向けて協議を行った結果、現地保存できない部分について記録保存を実施することとなった。

個人住宅建設事業に伴い令和4年1月31日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出がなされたとともに発掘調査の依頼が提出された。これを受けて令和4年2月7日付第202100276692号で鳥取県知事より発掘調査の通知が発出された。記録保存の現地調査は令和4年4月25日から6月3日までである。

なお現地調査から報告書作成までの作業は公益財団法人鳥取市文化財團に支援を受けた。

第2節 調査体制

発掘調査及び報告書作成時の組織体制は以下のとおりである。

1. 試掘調査

令和3(2021)年度 試掘調査 令和3年4月26日～5月28日 面積21.75m²

鳥取市教育長	尾室 高志
鳥取市教育委員会事務局文化財課 課長	佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員	佐々木孝文
鳥取城整備推進係 主任兼文化財専門員	細田 隆博
技 師	岡垣 賴和
保存整備係 係長兼文化財専門員	加川 崇
主任兼文化財専門員	坂田 邦彦
主 事	寺西 和代、田野 詩織
会計年度任用職員	長谷 早紀、松本 幸子、田中 瞳
鳥取市埋蔵文化財センター 所長	野際 章人　調査員 谷口 恭子

2. 発掘調査および報告書作成

令和4年度(2022) 発掘調査 令和4年4月25日～6月3日 面積97.3m²

鳥取市教育長	尾室 高志
鳥取市教育委員会事務局文化財課 課長	佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員	佐々木孝文
鳥取城整備推進係 主任兼文化財専門員	細田 隆博
技 師	岡垣 賴和
保存整備係 係長兼文化財専門員	加川 崇
主任兼文化財専門員	坂田 邦彦
主 事	寺西 和代、椿 保奈瀬
会計年度任用職員	長谷 早紀、松本 幸子
鳥取市埋蔵文化財センター 所長	野際 章人、調査員 谷口 恭子

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

布勢遺跡は鳥取市布勢に所在する。日本海沿岸の砂丘地後背に形成された潟湖である湖山池(周囲17.5km)の東沿岸にはそれぞれ独立丘陵である卯山(標高30m)と天神山(標高25m)がそびえる。布勢遺跡は湖山池を見下ろす卯山の北西緩斜面に展開する遺跡である。

[縄文時代]古くは旧石器～縄文時代草創期の可能性がある有茎尖頭器が大柄遺跡で見つかっている。続く縄文時代早期前葉の遺物が出土した高住井手添遺跡、前期中葉の高住平田遺跡、前期中葉の高住平田遺跡、前期末の良田中道遺跡、桂見遺跡、東桂見遺跡など湖山池周辺の特に南岸地域で多くの縄文遺跡が展開する。中期以降、東岸の天神山遺跡などが確認され、後期に入ると青島遺跡、桂見遺跡、布勢第1遺跡など遺跡数が増加する。このうち後期、布勢第1遺跡では漆塗広口壺や腕輪から高度な漆技術が確認され、桂見遺跡では外洋交易用と内海用の丸舟舟が相次いで出土し話題となった。

[弥生時代]桂見遺跡をはじめ縄文時代晩期と弥生時代前期の土器の共伴例が増えている。湖山池南西岸の松原田中遺跡は弥生時代の拠点集落と考えられており、水田と碧玉製玉作り工房等の生産遺構が見つかっている。中期では高住牛輪谷遺跡や高住井手添遺跡で大規模な木組み堰や護岸等の調査例がある。中期半ば、湖山第2遺跡、布勢第2遺跡等段丘状撒高地に立地する遺跡が目立ち始め、後期に入ると卯山の西裾に展開する帆城遺跡をはじめ、飛躍的に遺跡数が増加すると共に各遺跡内の住居数も増し、古墳時代へ続く傾向がある。祭祀遺跡として、青島遺跡、塞ノ谷遺跡があり、高住宮ノ谷は流水文銅鐸出土推定地である。弥生墳墓として、ガラス玉や鉄製品をもつ後期前半の松原1号墓、後期中葉の布勢鶴指奥1号墓、後期後葉に亘40mの県内最大規模をもつ西桂見埴丘墓、桂見埴丘墓、終末期の里仁1～3号墓と相次いで築造される。

[古墳時代]長大な木棺から舶載鏡など規模や内容で卓越した桂見2号墳が出現する。弥生墳墓の系譜を引く小規模な方墳が周縁丘陵に、その後次第に円墳が築造されるようになる。前方後円墳として山陰最古の前期中葉の本高14号墳(全長63.7m)、中期とされる里仁29号墳(全長81m)、県内最大規模の楕円1号墳(全長112m)等が点在する。後期になると卯山に布勢1号墳(全長60m)、桂見6号墳(全長24.5m)等、小規模な前方後円墳がみられるようになる。横穴式石室は6世紀中葉の葦岡長者古墳、後葉の倉見9号墳、高住12号墳等の調査例があるが石材豊富な千代川東岸と比べて石室自体が少なく、東岸の「中高式天井石室」に対し各壁一枚石からなる「阿古山型」が西岸地域で注目される。なお、高住牛輪谷遺跡では切妻造の家形陶棺片が出土、終末期古墳として7世紀中頃の山ヶ鼻古墳(古海13号墳)、松原1号横穴墓等がある。集落は弥生時代から続く遺跡が多く、西桂見遺跡では古墳築造期になると集落が丘陵上から斜面へと下る傾向があり、丘陵裾の現集落と一部重複する立地と考えられている。

[歴史時代]7世紀後半に高草評が立評され、律令体制下、布勢遺跡一帯は因幡国高草郡に属する。郡衙は鳥取市菖蒲付近に置かれたと推定され、7世紀後半創建の菖蒲廃寺跡が存在する。湖山池南岸は古代山陰道の敷設周辺域であり、桂見遺跡堤谷地区、良田平田遺跡、吉岡大海廢寺ほか、官衙や寺院関連遺跡の発見が相次いでいる。湖山池東岸地域では天平勝宝8年(756)、東大寺領として高庭荘が成立している。南北朝動乱後の貞治3年(1364)、室町幕府より山名時氏が因幡守護に任じられる。卯山中腹の日吉神社は時氏が近江の日吉大社を勧請して建立したと伝えられる。文正元年(1466)山名勝豊が布施天神山城を築き守護所とした。以後鳥取城へ移るまでの100年余り、天神山と卯山周辺は因幡の政治・軍事的中心となりえた。17世紀に描かれた古絵図のとおり、天神山周辺では内堀や土塁の他、井戸や焼け落ちた建物跡、周縁丘陵の布勢鶴指奥墳墓群や桂見墳墓群では中世墓が調査されている。

(引用・主要参考文献)

平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年

鳥取市教育委員会『令和3年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書 布勢遺跡』2022年

第2図 布勢道跡周辺遺跡分布図



第3章 調査の成果

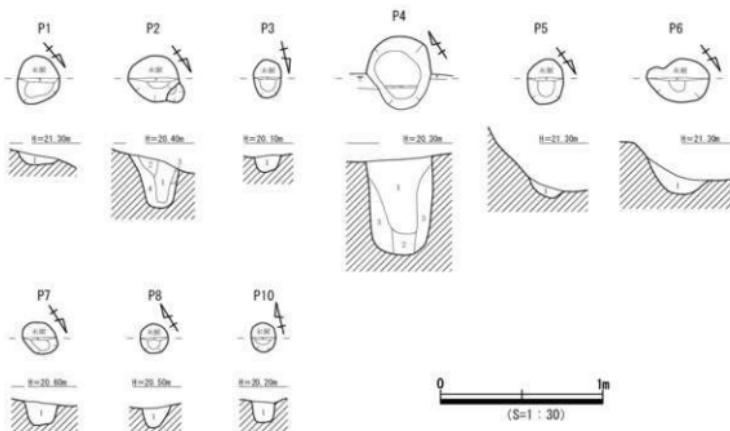
第1節 令和3年度試掘トレンチの調査（第1・3～6図、図版1・2・9）

布勢遺跡は鳥取市布勢に所在する。湖山池東岸にそびえる卯山（標高30m）に立地する6世紀前半築造の国史跡布勢古墳（布勢1号墳：全長60m前方後円墳）の北西縁辺に展開する遺跡である。卯山の北側の天神山（標高25m）山頂中心に天神山城（布施城）とその周縁に天神山遺跡が広がる。布勢遺跡周辺では住宅建設がすすみ、これまでの試掘調査で二次堆積ながら土師器皿や壺、土錐、瓦質鍋、すり鉢を含む陶磁器片など中世後半期を中心とする遺物や繩文土器、弥生土器なども出土している。

今回調査は布勢字大段に所在し、個人住宅建設事業に伴い実施したもので、布勢古墳の南西側古墳前広場から西へ一段下った標高21.7m前後の平坦地にトレンチ2本（Tr2, Tr3）を設定した。この平坦地は畑として耕作され、一時果樹栽培も行われ切株も遺存する。平坦地の西側には高さ1m弱のブロック擁壁、側溝、市道布勢1号線が敷設されている。なお、Tr2については令和4年度範囲を広げて調査を行っており、令和4年度調査分と合わせて後述する。

試掘トレンチTr3は、Tr2の6m東側、傾斜に沿った長軸をとる幅1.5×長さ9mのトレンチである。地表面標高は北側へ僅かな傾斜が認められる程度であったが、掘り下げるとトレンチ南東側では表土下10cmではほぼ平坦な地山面が広がり、第3層以下が北側へ向けて厚く堆積する。地山の標高は南端で21.68m、北端で20.01m、比高差1.67mを測る。表土下は褐色粘質土を基調とする第3・4層、その下に黒味かかる第5層、その下に黄褐色ブロックを全体に含む締まりのやや弱い第9層、さらに地山上層に黒色かかる第20・21層が観察される。地山は第33層が黄橙色のローム層、第34層は大山輕石層で、第32層は褐色土を含むが地山風化層の可能性がある。

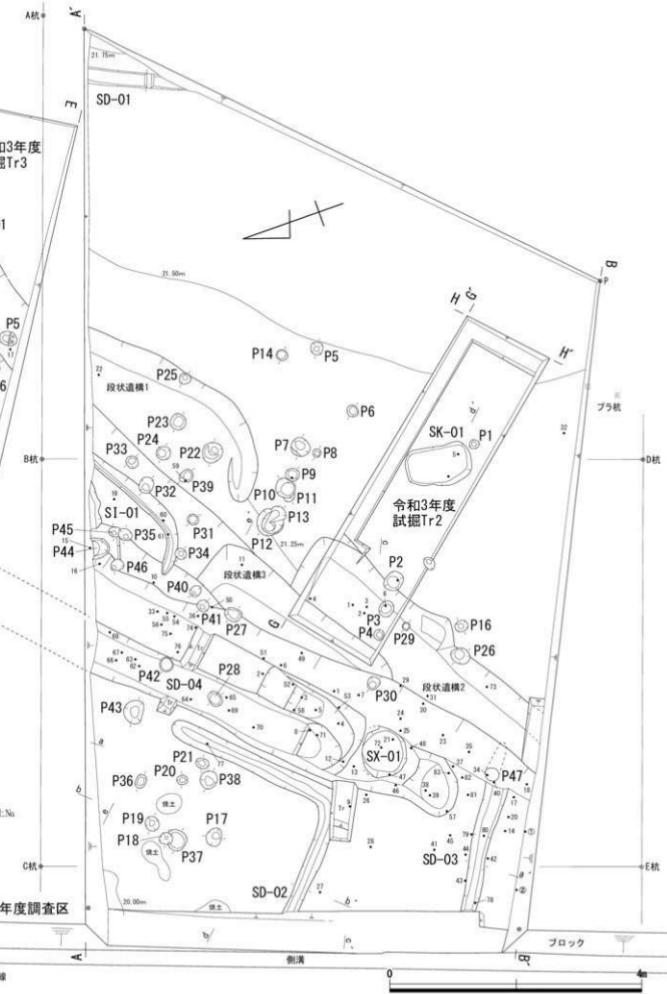
削平を受けたとみられる南東側平坦面を除き、Tr3全体でピット10基（P-1～P-10）、土坑1基（SK-01）、溝状構造3条（SD-01～03）を検出した。SK-01に重なるP-4を除き、P-1～10は地山を掘り込み、径17～52cm、深さ10～30cmを測る。SD-01～03は斜面の傾斜に対し直交する軸で、特にSD-02は幅15cmに対し深さ20cmと深く、ほぼ直立する壁面をもつ。トレンチ北側で検出したSK-01はトレンチ南西外へ広がり、深さ76cmで急傾斜の壁面から当初貯蔵穴あるいは落とし穴とも思われたが、後の令和4年度調



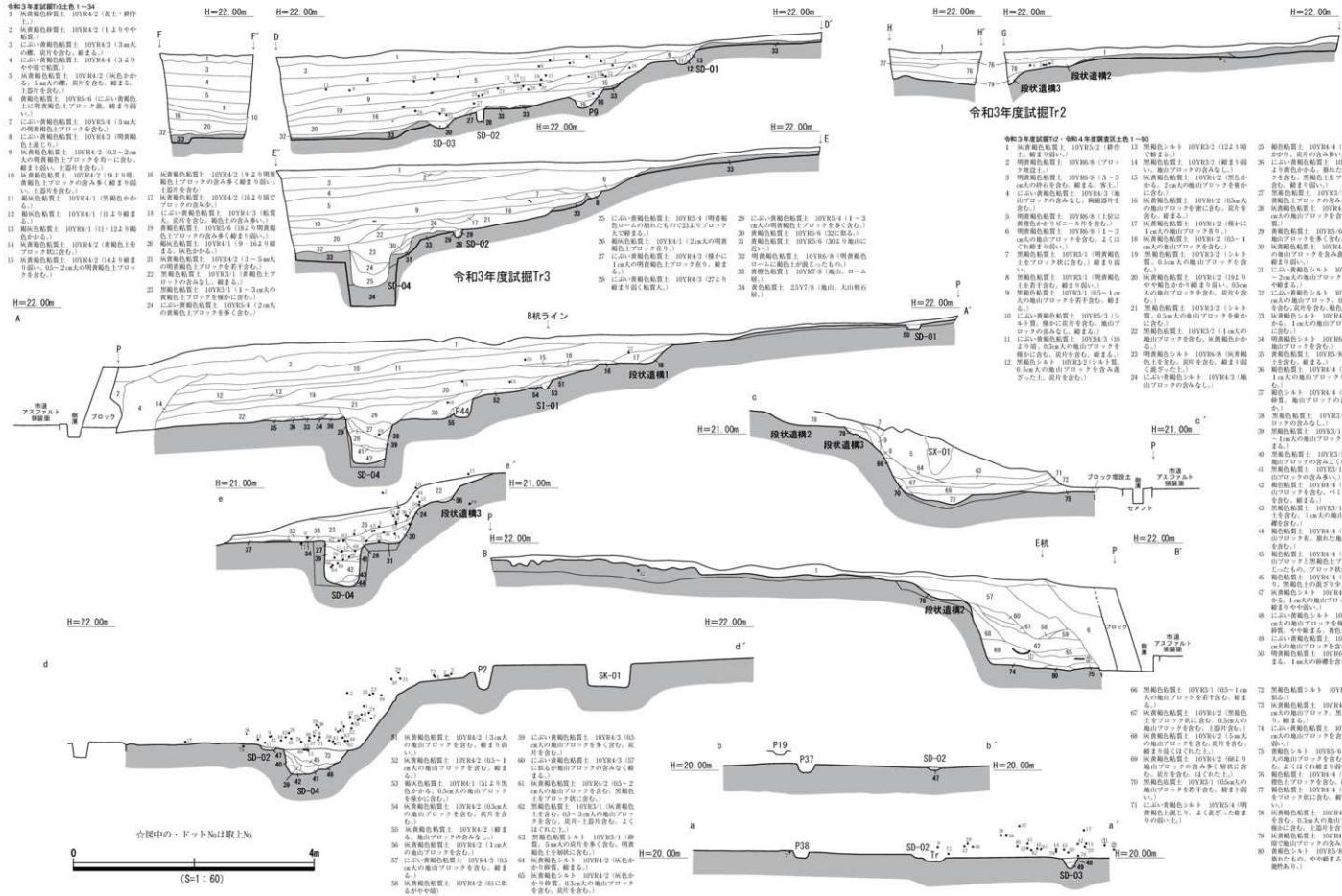
第3図 令和3年度試掘Tr3P-1～8・10実測図

探査番号-取上Na对照表

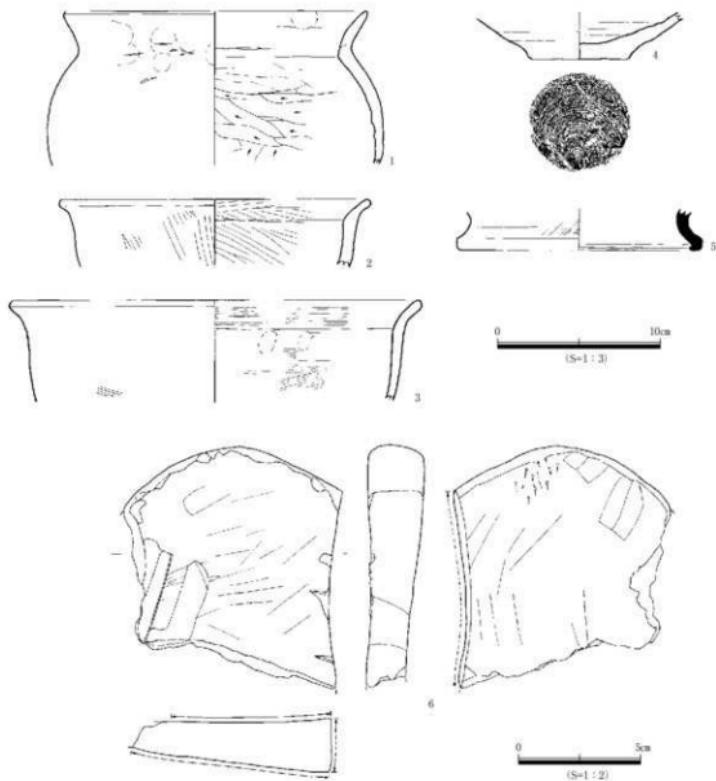
探査番号	取上Na
第6回1	Tr3-27
第6回2	Tr3-14
第6回3	Tr3-15
第6回4	Tr3-26
第6回5	Tr3-4
第6回6	Tr3-18
第6回7	—
第6回8	69
第6回9	70
第6回10	64
第6回11	—
第6回12	53
第6回13	3・6
第6回14	79
第6回15	1
第6回16	80
第6回17	36
第6回18	—
第6回19	46
第6回20	22
第6回21	22
第6回22	24
第6回23	24
第6回24	24
第6回25	24
第6回26	24
第6回27	24
第6回28	24
第6回29	24
第6回30	24
第6回31	24
第6回32	24
第6回33	24
第6回34	24
第6回35	24
第6回36	24
第6回37	24
第6回38	24
第6回39	24
第6回40	24
第6回41	24
第6回42	24
第6回43	24
第6回44	24
第6回45	24
第6回46	24
第6回47	24
第6回48	24
第6回49	24
第6回50	24
第6回51	24
第6回52	24
第6回53	24
第6回54	24
第6回55	24
第6回56	24
第6回57	24
第6回58	24
第6回59	24
第6回60	24
第6回61	24
第6回62	24
第6回63	24
第6回64	24
第6回65	24
第6回66	24
第6回67	24
第6回68	24
第6回69	24
第6回70	24
第6回71	24
第6回72	24
第6回73	24
第6回74	24
第6回75	24
第6回76	24
第6回77	24
第6回78	24
第6回79	24
第6回80	24
第6回81	24
第6回82	24
第6回83	24
第6回84	24
第6回85	24
第6回86	24
第6回87	24
第6回88	24
第6回89	24
第6回90	24
第6回91	24
第6回92	24
第6回93	24
第6回94	24
第6回95	24
第6回96	24
第6回97	24
第6回98	24
第6回99	24
第6回100	24



第4図 布勢遺跡調査区全体図



5図 布勢遺跡調査区断面図



第6図 令和3年度試掘Tr3出土遺物実測図

壺からSD-04の延長部と考えられ、Tr3内で終結することになる。

遺物はコンテナ1箱分が出土しており、弥生時代後期の壺片を僅かに含むが多くは土師器片で、糸切底部が目立ち須恵器片はさほど含まれない。このうち(第6図1～6)を図化した。(1)は第16層、(2)は第9層、(3)は第5層、(4)は第9層、(5)は第4層あるいは第5層、(6)は第7層の出土である。またP-9埋土で古墳時代中・後期の壺口縁部片、SD-03埋土で古墳時代中期とみられる布留系壺口縁部片が出土している。(1)は厚手のく字状口縁の壺で、口縁上位および肩部を中心に煤が多く付着する。外面および口縁部内面薄く細かなハケ目の中ナデ調整、頸部に工具痕が残る。肩部内面横位の鋭利なヘラ削り。胎土に雲母を含む。(2)土師器鍋は乳色かかるにぶい黄橙色で坏類に近い精緻な胎土で、口縁部は短く外方へ開き内外面粗いハケ目調整。外面に煤が付着する。(3)土師器鍋は頸部からゆるやかに外方へ開く口縁部で、外面は煤が厚く付着する。内面は横ハケ目調整。胎土中に1mm前後の砂粒の含みが目立つ。(4)は土師器坏の底部で、底部回転糸切り、置台の圧痕を観察。内外細かな単位のロクロナデ。(5)須恵器脚は体部からの剥離痕があり、絞り目を観察。底端部は内側に折り込みがあり段をもつ。(6)砥石は片端部を欠き、長軸遺存長9.9cm、表裏面と側面の計3面を使用。比較的の使用頻度が高く、鋭利な刃研ぎの痕が観察される。

第2節 令和4年度の調査

1. 層序の概要(第4~7図、図版4~6)

令和4年度調査区は、国史跡布勢古墳(全長60m前方後円墳)の南西に広がる古墳前広場から西へ1段下った平坦面に位置する。調査地の背後は古墳前広場から南西へ下る山道の斜面となっており、平坦面はこの山道の斜面裾部を掘削して西側へ拡張したとみられる。西端はセメントブロックで擁壁され、その直下に側溝と市道布勢1号線が通る。今回の調査区はこの平坦面の南西端、令和3年度試掘Tr2を含めた幅7~8m×長さ14.5m程の台形状の範囲である。調査前の地表標高は北東端で21.86m、北西端で21.02mを測り、東から西方向へ緩やかに下る。調査の結果、N-50°-E程の軸で調査区中程から西側へ大きく段をもつことが判明した。調査区南西では段差が1.4m余りにもなる。便宜上、この段から上位を上段、下位を下段と呼称する。

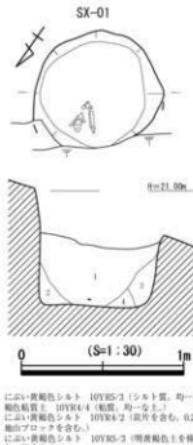
調査区の層序の観察は、北壁面A-A'、南壁面B-B'を中心に、調査途中で設定したトレーンチ断面e-e'、d-d'、c-c'で行い記録を作成した。このうち調査区の地形断面を的確に表すのはe-e'断面とd-d'断面であるが、両者とも重機による掘取り後、または調査途中段階で設定したことから上層が欠落している。調査区北壁A-A'と南壁B-B'では、現地表面からの土層が観察されたが、地形に対直交断面ではないことから、分かり難い断面となっている。

調査区の層序は全体を通じて第1~80層に分かれるが、北壁面A-A'における基本層序として令和3年度試掘Tr3壁面と概ね対応する。上層から順に、①耕作土の現地表土(灰黄褐色粘質土)②にぶい黄褐色粘質土、③灰色あるいは黒褐色かかる灰黄褐色粘質土、④地山ブロックを多く含む灰黄褐色粘質土、⑤褐灰色粘質土あるいは黒褐色粘質土、⑥地山である黄橙色ローム層である。②~④には底部糸切り坏、く字口縁鍋片を含み、概ね10~12世紀代と思われる。⑤は地山を掘り込んだ遺構の埋土および包含層で古墳時代前期~中期である。現地表の耕作土が第1層灰黄褐色粘質土、その下位の西側には地山の明黄褐色粘質土をブロック状に含んだ第3層が広がり、第4層は市道舗装の際ブロック擁壁を市道に沿って設けるにあたり充填されたとみられる客土層である。よって北壁では第10層以下の斜面高位から互層状の緩やかな傾斜層が基本層序の対象となる。第10・11層綺立たにぶい黄褐色粘質土が②対応、第11・12層が③対応、第19・20・21層が④対応、第30・32層が⑤対応と考えられる。

北壁以南の断面については下段の埋没状況を示すものとなっており、上段西際で検出された遺構の重複と下段の造成、後世の変容などにより北壁とはやや異なる様相を示す。上段では厚さ10cm余りの耕作土直下に地山面が露出、上段のピットの中には埋土中に弥生土器片や土師器系底の坏片を含むものが複数ある。下段は地山を深く掘削して平坦面を造り出している。下段の埋没土下層には古墳時代前期を中心とした遺物を多く含む。北壁断面A-A'の南西側トレーンチe-e'断面第23層明黄褐色シルト層は10cm大の明黄褐色土ブロック。灰黄褐色土・炭片を含む混ざった縮まりの弱いシルト層であるが北壁A-A'断面では観察されずd-d'断面手前付近にかけて広がる。第23層は上段からの搔き出し層と思われP17~21の基盤層となる。その他にも、上段を搔き均したと思われる第5層など部分的に明黄褐色土が広がる箇所が観察されている。なお、各層の出土遺物から第10・11層は12世紀代、第19・20層は9・10世紀代、第30~32・37・65~69・78・79層は古墳時代前期の遺物包含層と考えられる。

2. 検出した遺構・遺物

令和4年度調査で検出した遺構は、令和3年度試掘Tr2調査分を含め、土壙墓1基、竪穴建物1棟、段状遺構3基、土坑1基、溝状遺構4条、ピット47基である。

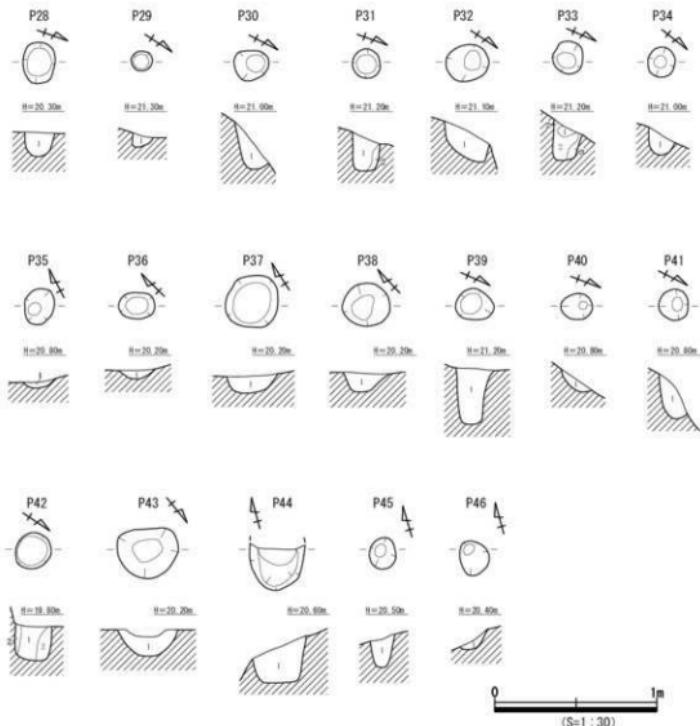


1. にぶい黄褐色シルト 10YR5-2 シルト質、均一な土。
2. にぶい黄褐色シルト 10YR5-2 (地盤、現地表土)
3. にぶい黄褐色シルト 10YR4-2 (炭片を含む、0.2mの大
地山ブロックを含む。)
4. にぶい黄褐色シルト 10YR5-3 (明黄褐色土を僅かに含
む、現地表土)

第7図 SX-01実測図



第8図 SK-01、P-1~27実測図



第9図 P-28~46実測図

第1表 布勢遺跡検出ピット一覧表

(強)青生、(青)青塗

調査区	遺構名	法 量(cm)	底面標高 (m)	土		出土遺物	備 考
				柱	土		
令和3年 試掘T2 (第5B)	P-1	30	8	21.17	1 灰黄褐色砂質土10YR4.2(やや縮む。) 2 灰褐色粘質土10YR4.2(粘片を多く含む。縮まる。)	—	半段未掘
	P-2	31	33	20.00	2 灰黄褐色粘質土10YR4.2(1よりやや明。3mmの黄褐色土ブロックを含む。) 3 灰褐色粘質土10YR4.2(2より黄褐色土ブロックの含み多い。) 4 にい・青褐色粘質土10YR4.3(0.3~1cmの大の黄褐色土ブロックを含む。縮まりやけい。)	土師片	半段未掘
	P-3	23	10	19.92	1 灰灰褐色粘質土(やや縮む。) 2 灰黄褐色粘質土10YR4.2(3~5mmの大の黄褐色土ブロックを僅かに含む。縮まり弱い。)	—	半段未掘
	P-4	45	62	19.60	2 灰黄褐色粘質土10YR4.2(1~3cmの大の黄褐色土ブロックを含む。縮まり弱い。) 3 黄褐色粘質土10YR4.3(2より灰色をかり色。1より1cmの大のブロックを含み。縮まる。)	丸底部片	柱根跡?
	P-5	29	12	20.86	1 黄褐色粘質土10YR5.6(灰黃褐色土を含む。)	—	半段未掘
	P-6	39	22	20.88	1 黄褐色粘質土10YR5.6(灰黃褐色土を含む。)	—	半段未掘
	P-7	23	14	20.37	1 にい・黄褐色粘質土10YR4.3(3の黄褐色土混じり。)	—	半段未掘
	P-8	18	13	20.25	1 にい・黄褐色粘質土10YR4.3(3mmの大の明黄褐色土ブロックを含む。) 18. にい・黄褐色粘質土10YR4.3(3の黄褐色土混じり。灰片を含む。縮まる。)	—	半段未掘
	P-9	18	13	19.93	18. にい・黄褐色粘質土10YR4.6(18より明黄褐色土ブロックの含み多く縮まり弱い。)	土師片	北壁 D-1 断面図
	P-10	18	13	19.93	1 橙灰褐色粘質土10YR4.1(3mmの大の黄褐色土ブロックを僅かに含む。縮まる。)	(青)土師片	半段未掘
令和3年 試掘T2 (第8B)	P-1	17	5	21.34	1 にい・黄褐色粘質土10YR4.3(3mmの大の黄褐色土ブロックを含む。縮まり弱い。)	—	
	P-2	33	38	20.85	1 灰褐色粘質土10YR4.2(黒褐色を含む。1cmの大の黄褐色土ブロックを含む。) 2 黄褐色粘質土10YR4.2(黄褐色土ブロックを多く含む。) 3 黄褐色粘質土10YR4.2(黄褐色土ブロックを均一に含む。) 4 にい・黄褐色粘質土10YR4.3(1より明。5mmの大の黄褐色土ブロックを含む。)	(青)土師片	

調査区	遺構名	法葉(cm) 長径 深さ	底面標高 (m)	堆 土	出土遺物	備 考
P-3	25	54	20.53	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(黒褐色かかる。0.5~1cmの大い黄褐色土ブロックを含む。)		
	20	24		2 黄褐色色粘質土10YR4-2(1より弱。縮まり弱い。)		土器部环
	31	49		3 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(1より明。0.5cmの大い黄褐色土ブロックを含む。)		
P-4	17	14	20.85	4 黄褐色色粘質土10YR4-2(1より黑色かかり縮まる。ブロックの含み少。)		
P-5	21	9	21.35	1 黄褐色色粘質土10YR4-4(2cmの大い地山ブロックを含む。僅かに炭片を含む。)		
P-6	20	24	21.18	1 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(0.5~1cmの大い地山ブロックを含む。)		土器部环
P-7	31	49	20.89	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(壓く縮まる。地山ブロックの含みなし。)		
P-8	14	7	21.35	2. 極褐色粘質土10YR4-4(崩れた地山ブロックを密に含む。)		柱痕跡
P-9	22	26	21.08	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5~1cmの大い黄褐色土ブロックを含む。)		
P-10	34	39	20.94	2 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5~1cmの大い地山ブロックを含む。炭片を含む。)		柱痕跡
P-11	19	34	21.02	3 黄褐色色粘質土10YR4-2(2より縛まり弱い。)		
P-12	40	53	20.78	4 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(1より明色かかる。)		(古)土器部
P-13	22			5 黄褐色色粘質土10YR4-6(崩れた地山ブロックを密に含む。)		
P-14	18	26	21.19	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5~1.5cmの大い地山ブロックを含む。縮まる。)		
P-15	21	6	21.31	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(1より強で地山ブロックの含みごく僅か。)		
P-16	21	11	21.26	2 黄褐色色粘質土10YR4-6(1cmの大い地山ブロックを密に含む。)		
P-17	30	12	20.21	3 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(崩れた地山ブロックを密に含む。)		
P-18	21	11	20.20	1 黑褐色シルト10YR3-1(黄褐色土・2cmの大い地山ブロックを含む。砂質。)		
P-19	24	8	20.24	2 にふく黄褐色色粘質土10YR3-6(1よりやや縮まる。炭片を含む。)		
P-20	17	18	20.17	3 黑褐色シルト10YR3-1(やや粘質。地山ブロックの含みなし。)		
P-21	22	5	20.26	1 黑褐色シルト10YR4-1(黄褐色土・1cmの大い地山ブロックを含む。よく混ざった土。砂質。)		
P-22	34	22	20.97	2 黄褐色色粘質土10YR4-6(1.5cmの大い地山ブロックを含む。)		(古)柱部
P-23	25	16	20.97	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5cmの大い地山ブロックを含む。炭片を含む。)		
P-24	23	42	20.68	2 黄褐色色粘質土10YR4-2(1より強で地山ブロックを多く含む。)		柱痕跡?
P-25	19	35	21.02	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-26	32	27	21.04	2 極褐色粘質土10YR4-2(2cmの大い地山ブロックの含みごく僅か。)		
P-27	27	14	20.61	3 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(崩れた地山ブロックを含む。よく縮まる。)		
P-28	25	15	20.02	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5cm~1cmの大い地山ブロックを含む。炭片を含む。)		(古)柱部?
P-29	12	9	21.08	2 黑褐色色粘質土10YR4-2(1cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-30	21	29	20.65	1 黑褐色色粘質土10YR4-1(0.5cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-31	18	23	20.84	2 黄褐色色粘質土10YR3-2(2枚から12.5cmの大い地山ブロックを含む。縮まる。)		
P-32	26	25	20.79	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5cmの大い地山ブロックを僅かに含む。)		(古)柱部?
P-33	20	25	20.90	1 典型的粘質土10YR5-8(褐色土塊。縮まり弱い。)		
P-34	18	17	20.73	2 黄褐色色粘質土10YR4-2(0.5cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-35	23	5	20.60	3 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(僅かに炭片を含む。1cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-36	22	5	20.08	1 黄褐色色シルト10YR4-2(砂質。縮まり弱い。2cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-37	35	12	19.96	1 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(縛まり弱い。0.3cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-38	29	12	19.97	1 黄褐色シルト10YR5-6(1cmの大い地山ブロックを含む。混ざった土。)		
P-39	24	35	19.77	1 黄褐色色粘質土10YR4-2(1cmの大い地山ブロックを含む。僅かに炭片を含む。)		
P-40	19	15	20.57	2 黑褐色色粘質土10YR3-2(0.5cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-41	19	27	20.42	1 黑褐色色粘質土10YR3-2(0.5cmの大い地山ブロックを含む。)		
P-42	23	23	19.54	2 黑褐色色粘質土10YR3-2(2cmの大い地山ブロックを含む。灰黃褐色土混じり。)		柱痕跡?
P-43	37	17	19.94	1 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(0.5cmの大い地山ブロックを含む。よく混ざり縛まりやや弱い。)		
P-44	(25)	28	20.18	1 にふく黄褐色色粘質土10YR4-3(0.5~3cmの大い地山ブロックを含む。炭片を含む。)		北壁 A-A'面
P-45	19	21	20.17	1 黄褐色色粘質土10YR5-6(崩れた地山ブロックを多く含む。)		
P-46	21	13	20.18	1 黄褐色色粘質土10YR5-6(崩れた地山ブロックを多く含む。縮まり弱い。)		
P-47	(50)	35	19.98	1 明黄褐色色粘質土10YR4-6(地山ブロックを多く含む。縮まり弱い。)		柱痕跡

令和4年
調査区
(第8-9回)

土壤墓SX-01(第4・5・7図、巻頭図版、図版4)

調査区下段の南寄り、標高21.02mで検出した。南壁B-B' 第6層の上面で検出した。上面径は現況で82cm×72cmの不整円形、検出面から深さ74cmを測る。断面はU字状で壁面の立ち上がりは急傾斜である。埋土は第1～4層に分かれ、均一で締まりの弱いにぶい黄褐色シルトを基本とする。ほぼ床面で大かと思われる歯牙を含む下顎骨片を検出した。埋土中に弥生土器や古墳時代前期の土師器細片を含むが、検出した層位から近代以降の土壤墓と推察される。

竪穴建物SI-01(第4・5図、巻頭図版、図版3・4)

調査区北壁沿い、上段と下段の境界部、標高20.80mで検出した。北東部は調査外へ延び、上部は第51層により流失する。遺存する南壁および壁溝周辺部の状況から、平面隅丸方形の竪穴建物と想定される。現況で辺2.1m、幅0.86mが遺存する。南壁面は壁溝底部まで16cmが遺存、第54層は貼床とみられ、床から壁溝底まで深さ7cmを測る。P44～P46のうちP44が主柱穴の可能性をもつ。壁溝上面より弥生土器底体部片(取上No. 60)、壁溝底より古墳時代前期と思われる体部片(取上No. 61)が出土している。

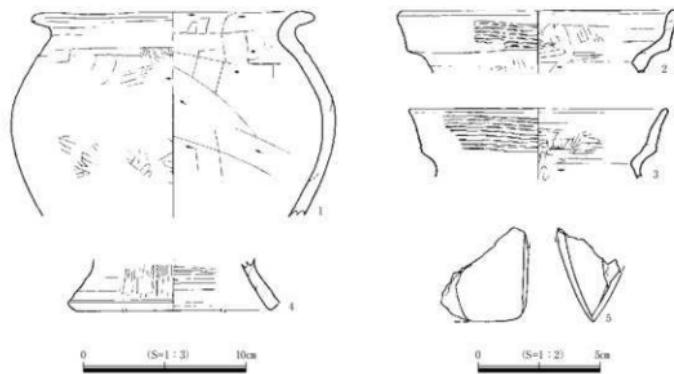
段状遺構1～3(第4・5・8図、巻頭図版、図版2・3・5)

調査区上段の西側で段状遺構1～3を検出した。いずれも斜面高位東側の壁面および平坦面の一部が遺存する。段状遺構1は、SI-01の直近上位にあたり、平面や南西壁端が壁溝状であることから竪穴建物の可能性があるが、平坦面を広く有しながらも壁溝がみられないことや第19層上面に床面を広げるとすればSI-01とは時期差があること等から段状遺構1として扱った。現況で辺3.4m、壁面高32cmが遺存する。段状遺構1の平坦面にはP-22～24、P-39が検出されているが、P-22では弥生土器底部片、P-24では古墳時代前期土器細片、P-39上面で土師器坏系切り底部(取上No. 59)が出土している。

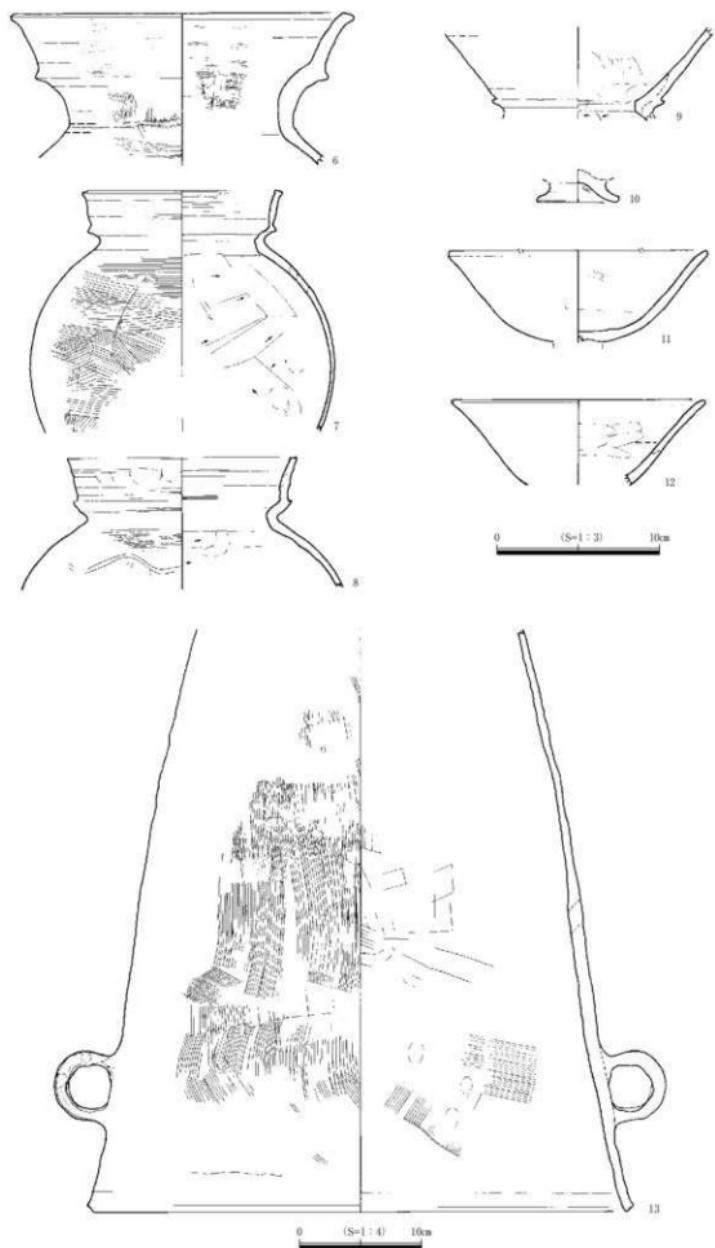
段状遺構2は平面L字状、現況で辺4.5m、壁面高30cmが遺存。段状遺構3は平面コ字状、現況で辺3.42m、壁面高22cmが遺存する。段状遺構2・3についても竪穴建物の可能性を残すが不明な部分が多い。段状遺構2では令和3年度試掘トレンチTr2掘り下げの際に第78層黒褐色粘質土から鼓形器台や綾杉文のある壺頸部片をはじめ古墳時代前期の土器片(取上No. 1～4)が出土している他、段状遺構2および3西側下段斜面沿いの第8・9・66層黒褐色粘質土で(第11図6・8)や(取上No. 51～53)など古墳時代前期土器が多数出土している。

土坑SK-01(第4・5・8図、巻頭図版、図版2・3・5)

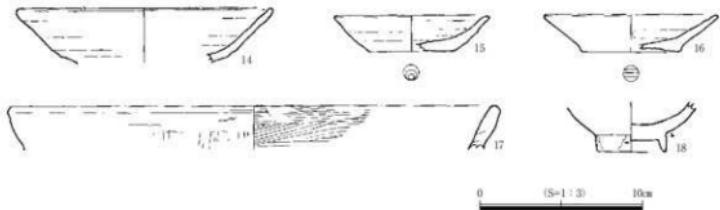
調査地上段南寄り、標高21.38m、令和3年度Tr2で検出した遺構である。長軸104cm、短軸63cmの平



第10図 令和4年度調査区出土遺物実測図(1)



第11図 令和4年度調査区出土遺物実測図(2)



第12図 令和4年度調査区出土遺物実測図(3)

面歪な長方形を呈し、検出面から深さ43cmを測る。地山を深く掘り込んでおり、断面はU字状で壁面の立ち上がりは急傾斜である。埋土は第1～3層に分かれ、地山ブロックを多く含み縫まりの弱い第1層褐色粘質土から混入とみられるく字状口縁部壺片、体部細片が出土している。

溝状遺構SD-01～04(第4・5・10図、巻頭図版、図版2～6・8・9)

調査区上段と下段で溝状遺構SD-01～04の計4条を検出している。SD-01は上段東端で斜面の傾斜に対し直交気味のN-25°-Eへ軸をとり両端ともに調査区外へ延びる。幅23cm、現存長1.6m、深さ4cmを測る。SD-02は調査区下段の中央部、標高20.06mで検出、幅21～30cm、深さ5cmの溝が平面L字状に遺存する。東側にSD-04が並走する。P-43の上層から北壁面の第33層、さらに調査区外へ続くと考えられ、一辺4.3m以上を測る。SD-02の区画内には深さ5ないし12cmと浅いP-36～38、複数の焼土が検出されている。建物を構成するようなピットではないものの一時期の遺構面と考えられる。SD-02埋土から古墳時代前期頭部片(取上No. 77)が出土している。SD-03は調査区南壁面寄りで下段に対し直交するN-59°-Wをとり西側は調査区外へ延びる。深さ17cm、東側は下段壁面により終結するが、壁面に横穴状に50cm程掘り込まれたP-47が配置することから、SD-03に横木等を埋設してP-47で固定した可能性がある。P-47奥壁埋土から古墳時代前期の壺肩部が出土している。SD-04は調査区下段の底部階から60cm程東側を並走し、主軸は軸をN-45°-Eに振る。北東端は令和3年度試掘Tr3の北西部で終結する。南西側では上層に第73層を埋土とした長さ6.6m程の浅い土坑状の窪みが重複する。全長7.74m、幅77cm、深さ76cmを測る。断面はU字形で、壁面は急な立ち上がりである。底部の標高はTr3のE-E'断面で19.43m、A-A'断面で19.42m、e-e'断面で19.40m、南西側終結付近のd-d'断面で19.56mを測り、底面の比高差はさほど認められない。埋土は北東側のTr3 E-E'断面およびA-A'断面付近では後世に掘り返しされとみられる第26・27層を観察、埋土の中位第39層黒褐色粘質土から(第10図2～4)をはじめとする弥生時代後半の土器片が出土している。第39層の下位第42層褐色粘質土は地山ブロックを多く含み縫まる埋め立て土のような層で僅かに土器細片が確認されているが遺物をほとんど含まない。

ピット状遺構P-1～47(第3～5・8・9・12、巻頭図版、図版2～8、11)

調査区上段西寄りから下段にかけてピット状遺構47基を検出した。このうち上段で検出した23基は地山を深く掘り込むものが目立ち、このうちP-1・5・8・15は溜り状でこれらを除くと平均で長径24.7cm、深さ31.9cmを測る。このうちP-2、P-3、P-9では埋土から土師器系切底片や壺皿片が、P-6・7では弥生土器細片、古墳時代前期体部片が出土している。上段から下段へ下る中位には、SI-01関連とみられるピットも含め、P-30～34、40・41など12基を検出しており、平均長径21.3cm、深さ20.16cmを測る。また、P-25～P-46を結ぶラインとP-7～P-27を結ぶラインは斜面の傾斜に直交方向の軸をとり、土層断面に柱痕跡を有するものが複数あるなど、これらピットの中には構造物を構成する柱穴である可能性をもつものがあると思われる。下段で見つかったピットのうち第23層明黄褐色シルト上面で検出したP-17～21の5基は、平均で長径22.8cm、深さ11.4cmを測る。その他P-28とP-42はSD-04検出面で、P-47はSD-03絡みのピットである。P-47を除いて平均28.5cm、深さ14.0cmを測り、小規

模で浅いピット中心である。P-36～38についてはSD-04で区画された範囲内に複数の焼土と共に検出されていることから何らかの痕跡を示す遺構と考えられる。

出土遺物(第4・5・10～12図、図版4・5・9～11)

令和4年度調査区で出土したコンテナ5箱分の遺物のうち(1)～(18)を図化した。大きく弥生時代後期(第10図)、古墳時代前期(第11図)、平安時代後期(第12図)に分かれ、多くは古墳時代前期、次に平安時代後期、弥生時代後期の遺物はSD-04を中心に量的には僅かである。弥生土器甕(1)はSD-03の南の第69層出土、端部の形状や厚さが定まらず上端面未調整であることから口縁未成と思われる。肩部に煤が多く付着する。(2～4)はSD-04第39層で出土。(2)(3)は甕の複合口縁部。(4)は縫部の形状から脚部とした。(2)は直立気味に(3)はやや外方へ開き縫部は先細りとなる。外面に貝殻腹縁によるやや波状の平行沈線文。柱状石斧の刃先(5)は第67層で出土、V字状の刃を丁寧に研ぎ出している。(第11図)では(6)は第68層、(7)(9)(13)は第69層、(8)は第66層、(10)は第24層、(12)は第64層もしくは第66層の出土である。壺(6)と甕(7)(8)は、口縁上端が平坦な面をもつ。鼓形器台(9)は短く開き、接合部が短く受部の稜も(8)同様に稜の上位を工具で強く押し強調している。低脚坏の脚部(10)は坏部への剥離痕が残る。高坏(11)(12)は口径に対し深めの無稜高坏である。今回唯一出土した瓶形土器(13)は南壁で出土、一对の環状把手を広口部寄りに貼付けている。(第12図)では(14)はP-2、(15)はP-9出土、(16)は第11・12層あるいは第19層、(17)は第20層、(18)は第11層の出土である。他にも土師器系切り底部の坏皿は北壁周辺を中心で出土しており、今回須恵器坏皿類は確認されなかった。鍋(17)は外面に多量の煤が付着、内外ハケ目による調整である。白磁小形碗(18)は底径3.8cmの直立する削り出し高台で、灰白色の釉は貫入が認められる。

第3節 まとめ

今回報告した令和3年度試掘Tr2・3、令和4年度調査区は、卯山の北西緩斜面に広がる布勢遺跡の南西端、段状になった標高21.7m前後の平坦面に位置する。令和3年度Tr3で溝状遺構3、ピット10、令和4年度調査区から土壤墓、竪穴建物、段状遺構3、土坑、溝状遺構4、ピット47を検出した。西側でローム層1m余りを掘削して下段平坦面を造成し、この面で埋土中層に弥生土器を含む溝状遺構SD-04、L字状の区画溝SD-02、段差壁を利用した区画溝SD-03、焼土とピットを検出した。須恵器や土師器坏などの混入がなく古墳時代前期後葉の遺物包含層で覆われることから当該期が妥当と思われる。上段では竪穴建物や段状遺構が重複し、北東側ではTr3の様相のように下段へは緩やかな傾斜斜面となりピットや溝などの重複とさらに北東への遺構の広がりが予想される。SI-01をはじめTr3の地山で検出した遺構からは古墳時代前期遺物が出土することから、この時期の集落が展開していた一帯と考えられる。時を経て、平安時代後期とみられる段状遺構1や上段ピットの状況、土師器坏皿類を含む遺物包含層のTr3側への堆積状況などから再びこの時期に遺構の広がりが確認される。今回の調査地から70m北東の令和3年度調査では、奈良～平安時代後半の遺構面と弥生土器や京都系土師器皿が出土、天神山城を望む卯山北東地域では中世後期～近世前期の遺物が出土している。なお卯山の南西裾に展開する帆城遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物や中世前期の遺構が見つかっている。卯山を中心とする一帯は中世後期の室町時代末に築かれた天神山城の繁栄以前に栄えていた地域とされ、弥生時代～近世前期と時期ごとに場所を移しながら展開していた様子が今回の調査からも窺える。湖山池への眺望の良さなどから今後も開発が予想される地域であり注視の必要とともに今後の調査成果に期待したい。

【参考文献】

- 大野哲二 2016年「鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について」『下坂本清合遺跡Ⅰ』(公財)鳥取県教育文化財団調査室
鳥取市教育委員会 2022年「令和3年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書 布勢遺跡」

第2表 布勢遺跡出土遺物觀察表

令和3年度試掘Tr3出土

法量:()復元値、()推定値

埋蔵番号	種別器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	①胎土・焼成・色調	残存状況	備考	推定値
第6回 1	土器部 鉢	口径 (18.2) 底径 (20.5)	なぐらか平底部をもち、底面から上方へ先端は細る角柱状の脚4個のチナ。工具痕あり。(内)部器左方向への鋸利なハサゲ痕。	①0.5mm以下の砂粒を含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) 焼かに残存 (胎) (焼) (体) (体)	保付番 (明) 1/4 1/6 1/6	49 (27)
第6回 2	土器部 盞	口径 (13.2cm)	男根張らず、底面から外方へ弧く開き、底面は丸く残める。	①1mm以下の砂粒を含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (明) 1/8 1/8	保付番 (明) 1/8	34 (24)
第6回 3	土器部 盞	口径 (13.2cm)	底面から小さな筋みで底面へ続き、口縁部は継やかに外へ弧いて底部は丸く残める。(外)全体に僅厚く付着のため不明。(内)ハサゲハサ。	①3mm以上の砂粒を含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (明) 1/8 1/6	保付番 (明) 1/6	25 (25)
第6回 4	土器部 底盤	底径 5.8	円筒状の深い凹切底部から大きく開き立ち上がる立体形。(内)全体にカッコ印。(外)軋転輪跡あり、板(?)の压痕あり。(内)ハサゲハサ。	①0.5mm以下の砂粒を含む。 ②(内)外に赤褐色。	(底) 底盤上半 (外)底盤上 底盤	残存 3/4 黒斑あり	48 (26)
第6回 5	頭蓋部 (頭部)	底径 (14.6)	留字ハサギに開き、底面は丸く内側に巻き込み段をもつ。体质の剥離痕あり。(内)外ヨコナギ。外面に殺目あり。	①1mm以下の砂粒を含む。	(底) 底盤上半 (外)底盤上 底盤	残存 2/4	22 (4)
第6回 6	L W T 砾石	(9.9) (8.9) (2.4)	長輪片状欠損、切端片側面破損。表面及び裏面の計3面を使用。傾斜面に刃物状の凹痕ある。	③に赤褐色。			(296)g (38)

令和4年度調査区出土

第1回 1	陶土土器 鉢	口径 (15.4) 底径 (19.8)	縦やかな腹から底部へ底面へ急落し、やや厚壁として丸く膨らむ。上面には1条の横縫目。(内)部器ハサギのチナ。(内)ハサゲハサ。	①1mm以下の砂粒を多く含む。2mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(II-体) (胎) (焼) (合) (体)	保付番 黒斑 大-次成 SD-04	20 (20)
第1回 2	陶土土器 盞	口径 (16.3)	縦やかに外方へ開き、底面は丸く残める。(外)輪郭部外側に赤褐色斑状による赤染の平行弦文状。表面はヨコナギ。(内)部器ハサギのチナ上邊ヨコナギ。腹部以下ハサゲ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。2.5mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/12 1/6	保付番 或 或 SD-04	69 (69)
第1回 3	陶土土器 盞	口径 (15.6)	外方へ開き縦部は丸い複合口縁部。表面はヨコナギと並んで3条の平行弦文状。表面ヨコナギ。(内)ハサギのチナ。(内)ハサゲ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。2mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/4 1/8	保付番 黒斑	70 (70)
第1回 4	陶土土器 盞	底径 (12.0)	留字ハサギに開き、内側部や外側部底面はヨコナギ。(内)ハサギのチナ。(内)ハサゲ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。2mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(胎) 1/8	保付番 64 (64)	
第1回 5	磨製石斧	L W T (3.8) (3.5) (2.1)	柄狀(?)刃石切の刃先。正面からV字形に刃を鋭す。道有する斜面側面に矢印や斜め矢印が施さる調査。	③削り跡赤色、研りリープ赤褐色、黒斑			(20)g (46)
第1回 6	土器部 盞	口径 (19.7)	上部端を下方へ幅み平底部をもち。下端の脚もまた出る複合口縁部。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/3	保付番 黒斑	3-6 (3-6)
第1回 7	土器部 鉢	口径 (11.4) 底径 (18.6)	U字端は広く緩やかな平面をもち、下端の脚もまた出る複合口縁部。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 3/8 1/4 1/8	保付番 或 或 SD-04	79 (79)
第1回 8	土器部 盞	口径 13.2	U字端上部端は広く緩やかな平面をもち、下端の脚もまた出る複合口縁部。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/2 3/8	保付番 1 (1)	
第1回 9	土器部 (頭骨) (頭部)		受取部は直線的に開き、後部内部は6段階で、開いて右台部へ接し、右部の内側は上部を工具で削り取られた跡である。(内)受取部は左側の頭骨の右側に接合部がある。(内)受取部右側合接部等へ開き、右台部へ接する。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/4 1/4	保付番 80 (80)	
第1回 10	土器部 (頭骨) (頭部)	4.8	留字ハサギに開く縫隙。底部は先端り丸く終える。底部への接合面あり。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(胎) 2/3	保付番 36 (36)	
第1回 11	土器部 (环) (环)	口径 (15.6)	环底部から外方へ立ち上がり、先端は幅狭く後に細くなる。工具痕あり。(内)部器外側に4mm刻突穴あり。(内)底部にノミ跡がある。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/6 1/8 1/4	赤物 337 (337)	
第1回 12	土器部 环(环)	口径 (15.4)	环底部から外方へ立ち上がり、上部は継やかに外反する。先端を丸く納める。工具痕あり。(内)部器外側に4mm刻突穴あり。(内)底部にノミ跡がある。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/5 赤物	53 (53)	
第1回 13	土器部 环(环)	口径 (43.7)	环底部から内方へ立ち上がり、底部は円筒形平面をもつ。环(?)底部から7cmこれまで底部の把紐を巻き付けて。把手は断面楕円形、本体に縦溝があり、把手側に斜め矢印が施さる。(内)底部にノミ跡がある。底部ヨコナギ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/12 P-2	92 (92)	
第1回 14	土器部 环	口径 (15.3)	環やかな環底部へ立ち上がる。(内)ハサゲハサ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) 1/8 保付番 (明)	85 (85)	
第1回 15	土器部 直	口径 (9.2) 底径 (2.2)	环底部から内方済み底面に立ち上がりに環底部は先端り丸く終え。(内)部器ヨコナギ。底部外側面切欠。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。1mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 1/9 1/4	P-9 (97)	
第1回 16	土器部 直	口径 (10.4) 底径 (5.0)	环底部から継やかに立ち上がりに環底部は先端り丸く終え。(内)部器ヨコナギ。底部外側面切欠。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。 ②(内)外に赤褐色。	(II) (胎) 3/8 3/8	2 (2)	
第1回 17	土器部 直	口径 (29.2)	厚手でやや歪な環底部。底部は丸い。(内)部器外側面に削り跡がある。(内)底部ハサゲハサ。(一部)ナギ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む。2.5mm 大-3mmの大粒の砂粒有。 ②(内)外に赤褐色。	(II) 1/8 保付番 (明)	22 (22)	
第1回 18	白磁 (高行部)	底径 3.8	ほぼ直立する割り高台。高台外面に部分的に堆積あり。白磁底もしくは灰胎。	①1mm-2mmの砂粒を含む。 ②(内)外に赤褐色。	(高台) 3/4 貯入値 (明)	貯入値 (明)	(取)上30



布勢遺跡調査地遠景(北西から)



布勢遺跡調査地近景(南西から)



令和3年度試掘Tr2、3設定状況(北東から)



令和4年度調査区近景(北東から)

図版2



試掘Tr2掘り下げ状況(北西から)



試掘Tr3掘り下げ状況(北西から)



試掘Tr3掘り下げ状況(南東から)



試掘Tr3北東壁土層断面(南から)



試掘Tr3南西壁土層断面(北西から)



試掘Tr3北西壁土層断面(南東から)



試掘Tr3北西部遺構検出状況(南西から)



試掘Tr3P2断面(北東から)



令和4年度調査区全景
(北東から)



調査区中央部
遺構検出状況
(北東から)



調査区下段
遺構検出状況
(北東から)

図版 4



調査区A-A'断面(南西から)



調査区e-e'断面(南西から)



調査区c-c'断面(北東から)



調査区B-B'断面(北西から)



SI-01検出状況(北西から)



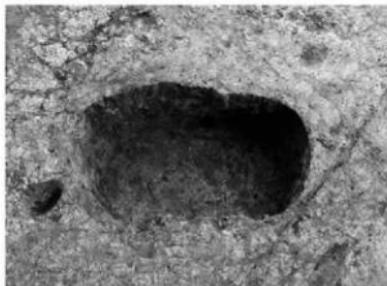
段状遺構1検出状況(南西から)



段状遺構2、3検出状況(北東から)



SX-01検出状況(北東から)



SK-01検出状況(東から)



SD-01検出状況(北東から)



SD-02~04検出状況(北東から)



SD-02・04完掘状況(南西から)



SD-03周辺遺物出土状況(南西から)



SD-03検出状況(北西から)



調査区北壁A-A' SD-04断面(南西から)



調査区e-e' SD-04断面(南西から)

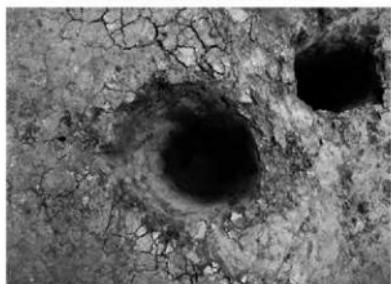
図版 6



調査区d-d' SD-04断面(南西から)



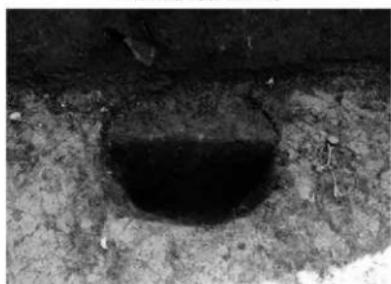
SD-04完掘状況(南西から)



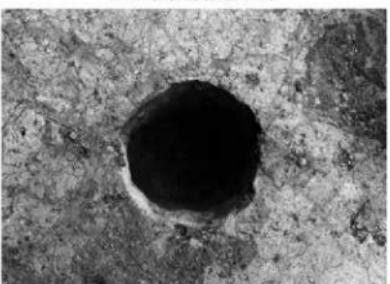
P-2完掘状況(北東から)



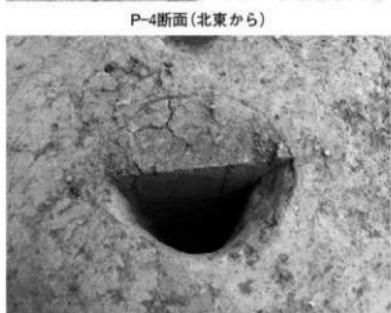
P-3完掘状況(北東から)



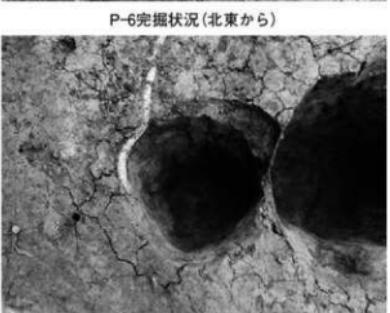
P-4断面(北東から)



P-6完掘状況(北東から)



P-7断面(北東から)



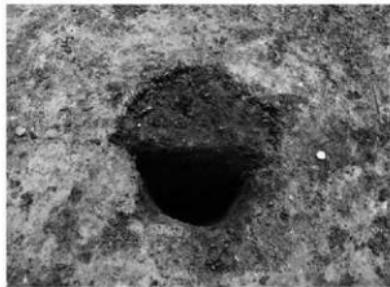
P-9完掘状況(北東から)



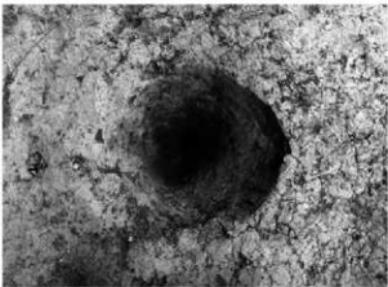
P-10・11断面(北西から)



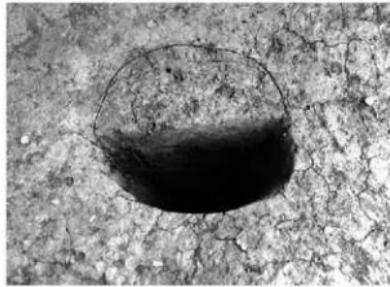
P-17～21検出状況(南から)



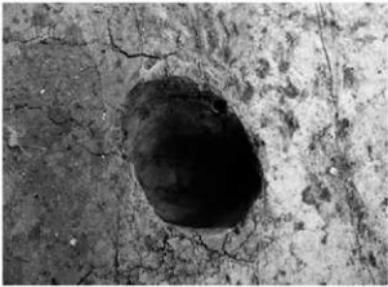
P-20断面(北東から)



P-22完掘状況(北東から)



P-24断面(北東から)



P-25完掘状況(北東から)



P-28断面(北東から)

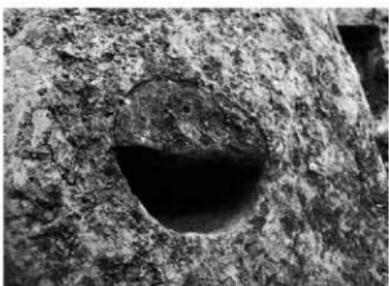


P-31断面(北東から)

図版8



P-32断面(北東から)



P-33断面(北東から)



P-36断面(南西から)



P-37断面(南西から)



P-39断面(北東から)



P-42断面(北東から)

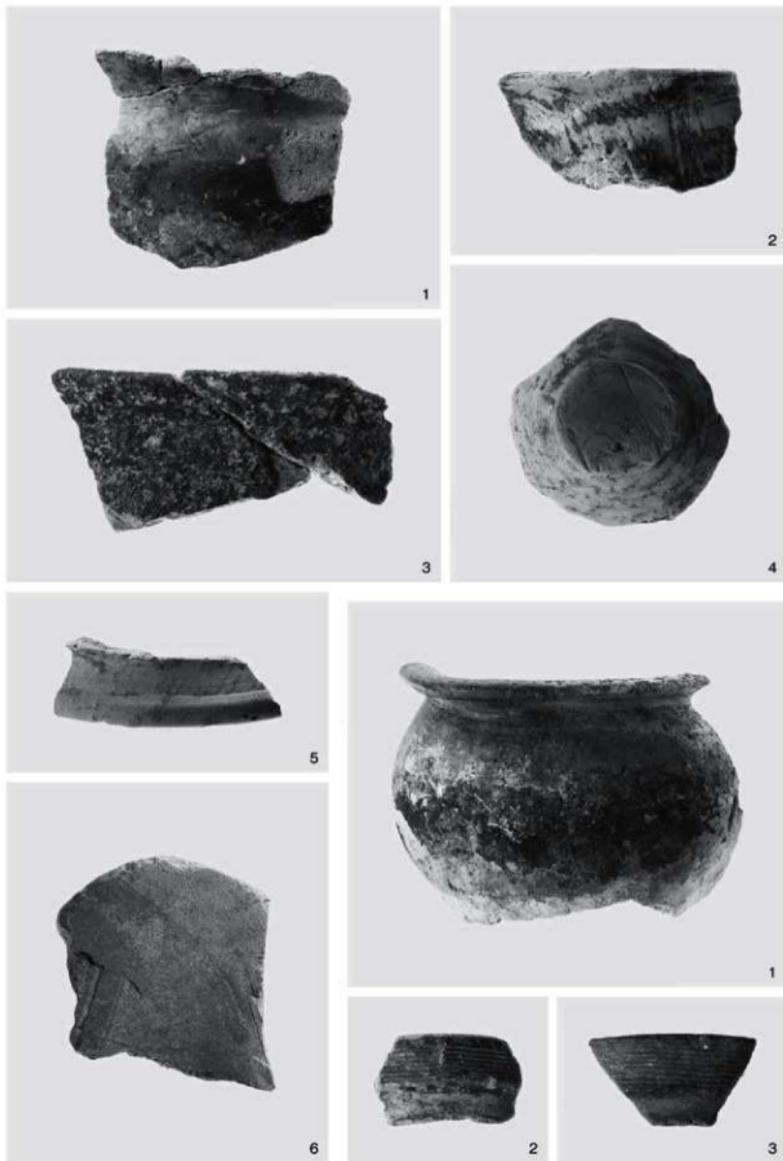


P-43断面(北東から)



P-44断面(南から)

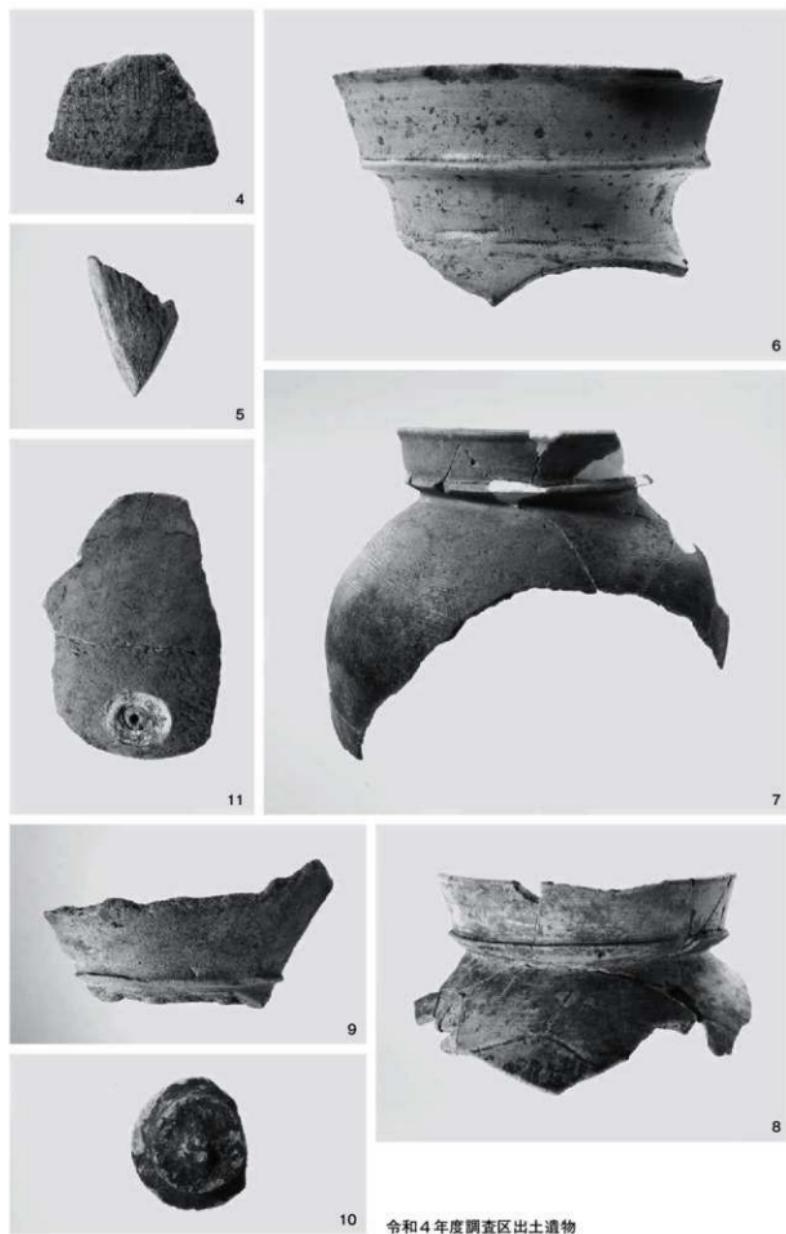
図版9



令和3年度試掘Tr3出土遺物

令和4年度調査区出土遺物

図版10



令和4年度調査区出土遺物



令和4年度調査区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふせいせき							
書名	布勢遺跡							
副書名	個人住宅建設事業に係る発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編著者名								
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市幸町71番地 TEL(0857)30-8421							
発行年月日	西暦2023年(令和5年)3月17日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
布勢遺跡 (試掘調査)	鳥取市 布勢	31201	1-326	35° 30' 10' 17"	134° ~ 33"	20210426 ~ 20210528	21.75	個人住宅建設
布勢遺跡	鳥取市 布勢	31201	1-326	35° 30' 10' 17"	134° ~ 33"	20220425 ~ 20220603	97.3	個人住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
布勢遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代前期 平安時代後期	堅穴建物 段状遺構 土坑 溝状遺構 ピット	弥生土器、石斧 瓶形土器、土師器 須恵器、白磁		・古墳時代前期、 平安時代後期の 集落。 ・大規模な平坦面 造成。		
要約	布勢遺跡は鳥取市布勢に所在する。湖山池東岸にそびえる卯山(標高30m)に立地する国史跡布勢古墳(全長60m前方後円墳)の北西縁辺に展開する遺跡である。今回の調査地は布勢遺跡の南西端地域にある。調査区西側でローム層を深さ1m余り掘削して造成された平坦面では区画溝とピットや焼土を検出、遺構埋土や覆われた遺物包含層から古墳時代前期と考えられる。上段では古墳時代前期の堅穴建物と平安時代後期の段状遺構や柱穴状のピットを検出した。また僅かながら弥生時代後期の遺物も出土している。卯山の南西裾には弥生時代後期の堅穴建物や中世前期の遺物を検出した帆城遺跡が広がるが、湖山池への眺望が良く湖畔に近い卯山山頂付近においても古墳時代前期の集落が営まれたことが明らかとなった。布勢遺跡は卯山の北に中世後期の室町時代末に築かれた天神山城の築城以前に栄えた地域とされてきたが、今回平安時代後期の遺構の広がりを確認できたことで、さらに補足する結果となった。							

布勢遺跡

—個人住宅建設事業に係る発掘調査報告書—

令和5年3月17日 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会

印刷所 勝美印刷株式会社